

私製 国語科の授業

——一人の国語科教師が考えること

堀田 悟史

一 はじめに —— 教師と学校の現状 ——

教師が休日の少ない、日常の仕事においても肉体的・精神的に酷使される職業、すなわち「ブラック」な職業という認識が進んでいる。この認識は、精神的に病んで休職・退職をする教師や不公平感などから部活動顧問の担当を断る教師の増加、TALIS 2013⁽¹⁾の調査結果がマスコミ等で大きく取り上げられたことによつて世の中で共有されるようになった。私としてはこれまで「ブラック」と認識されなかったことの方が不思議である。公立高校の教師であった約三十年間、「ゴールデンウィークというのは違う世界の話だ」と家族に言い聞かせてきた。「気づいていたはずなのに知らぬ存ぜぬの態度を取られていた」という方が正確だろ

う。また、「教師＝聖職」という認識も本来の意味ではなく、いつの頃からか「知らぬ存ぜぬ」を決め込むための方便に使われていたというのが本場のところだろう。そろそろ教師の良心に甘えることも限界に達してきた。

教師の仕事が際限なく増えている現実がある。様々な要因が複合的に絡み合っていることは確かである。単純に対処できることではない。これまで何とか統一感を保っていたパッチワークの模様も、そろそろ模様として認識できなくなってきたように思う。

それがよくわかる例として、現在学校で行うことが期待されている「〇〇教育」とそれに類するものを見てみよう。龍谷大学の須原洋次は、学校に期待されている「〇〇教育」とそれに類するものを整理して、大学の講義で学生に示している。それが、図1である。しかし、これだけの期待を学校への新たな人とお金の注入もなく、しかも限られた授業時間の中で行うことが可能であろうか。実際は一時に比べ人もお金も減らされている。その中で、中身を伴いながらこれだけの期待に応えることは可能であろうか。この問いに対する私の回答は、「不可能」ではなく「無理」である。

またバブル崩壊後のこの二、三十年、経済の回復と

学校教育への期待

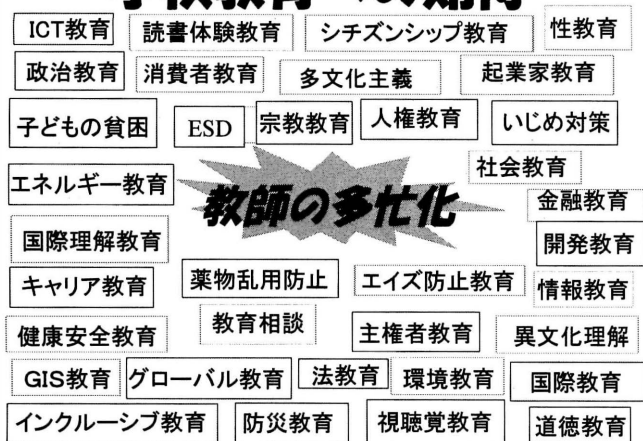


図 1

成長のために経営の効率化が重視されるなか、企業経営の論理が教育の世界に持ち込まれる傾向が強くなった。企業経営の論理を教育にも持ち込むなら、「スクリップ&ビルド」という企業経営改革の考え方も持ち

込むべきである。これまで、そして今も学校は「ビルド&ビルド」で進んでいる⁽²⁾。

その結果が、図1だと私は考える。この図には教科教育は入っていない。学校教育の根幹であり、自明のことだからであろう。しかし、入れることができないほど他の期待の方が大きい現状を表しているとも理解可能である。もし、教科の指導は塾や予備校でという考え方が私たちの中で徐々に共有されていることが反映されていると理解するなら、学校におけるこれからの教科教育に危うさを覚える。

荻谷剛彦は、「教育にできないことを考えること」の必要性を早くから述べている⁽³⁾。まさに「スクラップ」の部分である。私は、スクラップができないことが学校における教師の仕事の増加につながり、ひいては自明の仕事として捉えられている教科の授業——小稿では「国語科の授業」——にも悪影響を与えていると考えている。

また、企業経営の論理や効率化が教育に持ち込まれることによって、必ず成果が期待できる学問研究・教育への人とお金の注入が進んでいる。それは公教育の平等性に大きな問題を生じさせていると思われるが、ここでは詳しく述べない⁽⁴⁾。

二 「学校」と「授業」における大切なこと

まず私が学校教育において大切だと考えていることの中から、次の二点を取り上げる。

ア、お金で動かない人間を育成する

イ、非日常⁽⁵⁾の世界（思考）を体験させる

小稿の一で述べたが、企業経営の論理や効率化が学校教育に持ち込まれるにつれて、アが語られることは少なくなつたと経験的に感じている。場合によれば、アを持ち出すことが青臭い非現実的な話であると嘲笑の対象にもなっているのではないかと思う。講演に來た大学入試部の担当者が、生徒の前で高卒と大卒との生涯年収の差を持ち出して大学進学⁽⁶⁾の動機付けに使う状況がある。教師もその尻馬に乗る。「損／得」、別の表現を用いるなら「合格Ⅱ成功Ⅱ幸福／不合格Ⅱ不成功Ⅱ不幸」の単純なロジックで多くのことを処理してしまう傾向がより強くなつたと言える⁽⁶⁾。

日常生活ではお金は基本的に自分が楽をするため・楽しむために使う。しかし、運動部の合宿を考えると、お金を使って苦行を強制されに行く。日常生活におけるお金との関係で言えば、大変矛盾している。しかし、

そこで得られるものは、苦しみを負うために使ったお金に換えがたい価値のあるものであり、自身の力を大きく伸ばすきっかけになるものである。大学を含む教育の現場は、根本的にそのようなところだと私は認識している。そう考えなくなったことが、現在の学校教育が抱える様々な問題の根本にある。

しかし、現実の生活をお金に関わる経済的な問題と切り離して考えることはできない。だからこそ、この二者の関係を越えたところで生徒に思考させる機会を与えることが重要になる。そしてそれが学校の役目の一つになる⁽⁷⁾。この認識自体が、すでに時代とずれているのかもしれない。しかし、この根本的な認識を見失うと教育は間違つた方向に巧妙に誘導されていくことになる。それはとても危ういことだと思っている。

さて、アはいに結びついていく。「かわいい子には旅をさせよ」ではないが、人間は日常と非日常の行き来を繰り返して成長する。自覚の有無は別として、「自己を認識し、それを倒壊させ、再構築する」⁽⁸⁾中で人は成長していく。この過程が意識化（メタ認知）できれば、個々の大きな成長につながる。考えてみれば、様々な家庭や地域から同年齢の生徒が一カ所に集まること自体、学校という制度がなければ実現が難しいこ

とである。すなわち、学校は基本的に非日常的な空間なのである。積極的にそうあることを認めなければならぬ。

学校が非日常の世界であり、それに浸れるところであれば、日常の中に埋もれ（させられ）藻掻^{もが}いている生徒も、学校へは行きたい、さらに生きたいと思うかもしれない。日常と非日常の境目が曖昧になってしまったため、生徒に異常な緊張を強いている現実がある。一例をあげれば、携帯やスマホの世界を通して常にながり続けていることがその典型であり、周知のようにそれが原因となって登校できなくなる生徒も少なくない。命に関わる不幸な出来事も数多く起こっている。さて、次に授業に関して大切にしていることを三点あげたい。

ウ・一つのこと、継続的に時間をかけてじっくり取り組む

エ・カオスが生じることを大切にすること

オ・他者の考えを聞き、自分の意見を表現すること

多くの生徒は、問題演習にも近い切れ切れの学習を幼い頃から学習塾等で経験している。私立中高一貫の進学校では、高校二年生までに学習指導要領に定められた学習を終了し、三年生は大学入試に向けた演習を

行うことも珍しくない。受験に向けて学習を行うことは、やり方にもよるが多くの場合時間に追われる切れ切れの授業の連続になっていく。公立学校でも図1で示した学習が次々と投げ込まれて、生徒にとって学習が切れ切れになっていく可能性がある。

切れ切れの学習が蔓延している状況を踏まえ、学校でしかできない学習のあり方を考えたとき、答えの一つとしてウが浮かび上がってくる。大村はまの実践に代表される単元学習や橋本武による『銀の匙』の授業などがよく知られている。両者とも、教師が教材と生徒を深く理解することを大前提として、時間をかけて丹念に展開される授業である。教師のカリキュラムマネジメント能力も問われる。教科書や問題集依存の学習では決して成立しないものである。系統性があるその長期の学習体験の中で、生徒はコンテンツの理解だけでなく様々なコンピテンシーを獲得していく。

それは、エにつながる。系統性のある学習の中では積み重ねがあるがゆえに、どこかでどうしても秩序だてて考えることができなくなる状況、しこりのように疑問が残る続ける状況、「カオス」が生じる。それは、疑問の主體的な発見の芽である。そして学習を続けていく中で、それが思いもよらぬことともつながり、自

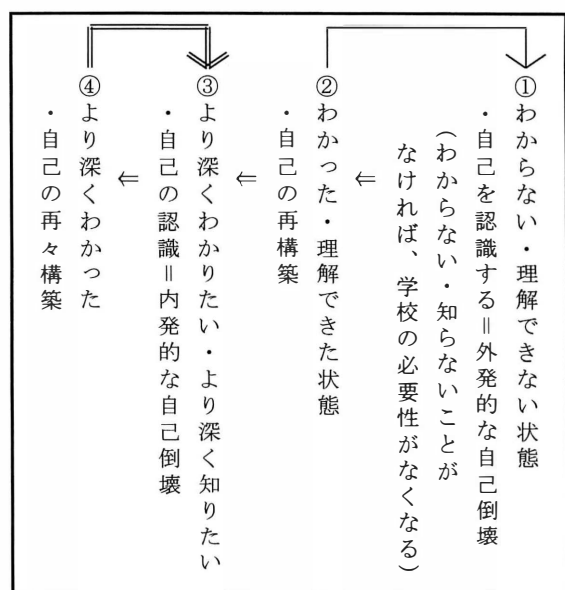
身が納得できる解決へと少しずつ向かっていく。

思いもよらないことと結びつく可能性は、教科を横断した学習の成立を容易にする。学習の期間が長いということとは、他教科と関連する学習内容を仕組んでいくことも容易になる。カオスが生じ、その解消に向けて考え続け、納得できる解決を得られたときの喜びを経験させることは、何よりも生徒の学習意欲を駆り立てるのではないだろうか。その意味でもカオスは重要なのである。

西林克彦は学習における一連の流れを示している⁽⁹⁾。それをベースにして、図2のような学習の流れを提示したい。学習はこの循環が生徒の中で継続的に繰り返されるのが重要である。カオスはこの循環の中で個々の生徒に生まれてくる。

カオスを解消するための大切な学習活動が才である。授業は他者の意見を聞くことが制度化されている場である。その典型は、教師の発言を生徒が聞くことである。

この段階で生徒から教師へいろいろな気づきが十分に提示されればよいのであるが、授業は教師と生徒の間に権力関係が成立しているため、とりわけ学習に自信のない生徒にとってそれは難しい。一方で教室は同



年齢層の基本的にフラットな関係の生徒同士で自由に考えを、指示さえすれば根拠を明確にした考えを交流することが最初から組織可能な場である。生徒・教師間にあるものとは別の権力関係があることも功を奏するかもしれない。同年齢層の他者の考えを聞くことで自己を知り、自己を倒壊させ、再構築する制度が確立されている。自己を否定的に捉えざるを得ないときも

図 2

あるだろう。しかし、それが自己を認識し、自己を倒壊させている証しである。倒壊で終わらせず再構築で、さるように支援をすることが教師の役目である。

三 「私製 国語科の授業」について

「私製」と題した理由について、「官製」と比較をして述べていくことから始めたい。少し荒削りだが、両者を次のように定義する。

① 「官製 国語科の授業」

・ 国や地方自治体の制度、教科書等の影響を強く受けて行う授業。もしくは、制度や教科書等の通りに行う授業。

② 「私製 国語科の授業」

・ 官製を踏まえながら、生徒の実態を踏まえて設定した学習の目標に合わせて、個々教師が創り出す授業

「官製／私製」については、葉書を思い浮かべてもらうとわかりやすい⁽¹⁾。学校教育で「官」に当たるものは、学習指導要領、教科書、学校のカリキュラム等である。一方、「私」に当たるものは、目の前の生徒の実態に即して学習目標及び学習内容と学習方法が教

師個々に委ねられる裁量と創意工夫である。ただし、目標は言葉や表現を理解したり、適切に運用したりできる力を高めることであり、決して受験対策ではない。ここで、私が「私製」を持ち出す理由を述べたい。

A （学校）教育が企業経営の論理や効率化と結びつけて語られる傾向が強くなっているため

Aを背景に、教育が一つの方向へ巧みに誘導されている状況があるように感じているため。教育に携わる者がそれに気づかずにいる状況、あるいは現状を無自覚に受け入れている状況に強く危うさを感じているため

Aについては、小稿の一で述べた通りである。

Bの例としては、多くの教師が高校の第一学年の第一学期には『羅生門』・『児のそら寝』（宇治拾遺物語）を読み、古典文法は一学期中に用言を一通り終わらせるということに何も違和感を持たなくなっている状態をあげる。いわゆる定番教材を教科書に入れなければ出版社の売り上げが上がらないのは、定番教材を扱う、あるいは定番教材をどう扱うかのレベルで授業を考えている現状の反映ではないだろう⁽¹⁾か。また、古典文法の学習進度は、業者による全国規模の模試の出題範囲に無自覚のうちに合わせているところがあるので

ないだろうか。その状況に強い危うさを感じている。少しでもそれに違和感を覚え、不自由さを感じているようであればまだよい。最初から「このようなものだ」と無批判に受け止めている場合が、特に危ういのである⁽¹²⁾。目の前の生徒の実態にそぐわなくても、与えられた教材を無批判に展開している教師に、「主体的・対話的で、深い学び」など成立させることはできるはずがない。

繰り返しになるが、我々が大きな力で一つの方向へ巧妙に導かれている現状を敏感に感じる力が、国語科の教師のみならずこれからの教師が持つべき重要な力だと考えている。そうでなければ本当の主権者教育などできるわけもないし、国語科では文学を教える意義を明確に自覚して授業を行うこともできない。「官製」が導くところを理解するためにも、「私製」は重要な手立てとなる。明確な教育目標を持った学校⁽¹³⁾では、共通教材・共通試験などは基本的にあらず、教師の「私製」の授業が大切にされている事実を考え合わせればよい。

以上のような考えのもと、「国語科の授業」を行ってきた。そのため、三十年程の教師生活で、その大部分を公立学校の教師でありながら、共通教材・共通試

験ではない「私製 国語科の授業」を展開してきた。私としては「生徒を目の前にして、そうするより他なかったのだ」と、振り返ってあらためて思う。

四 「私製 国語科の授業」の実践

ここでは、高校の現代文の実践を述べる。紙幅の関係で古典について詳しく述べることができない。古典については、拙稿⁽¹⁴⁾をご参照いただきたい。

現代文は、文学教材を軸とし三年間にわたる国語の授業を構成した。「どう書かれているのか」を学ぶための、単元的な学習と捉えていただきたい。具体的な文学教材と扱う時期は、次のような配当である⁽¹⁵⁾。

第一学年

『蜜柑』（芥川龍之介）（一学期）

『羅生門』（芥川龍之介）（二学期）

第二学年

『藪の中』（芥川龍之介）（一学期）

『こころ』（夏目漱石）（二学期）

（『山月記』（中島敦）（三学期））

第三学年

『舞姫』（森鷗外）（二学期）

『気がかり』（黒井千次）（二・三学期）

生徒の学力や配当された学年により、扱う教材と時期は臨機応変に対応する。例えば、一年生を担当せず

に二年生担当をした場合など、一年生で『羅生門』を読んでいるので、一学期に『蜜柑』、二学期に『ころ』を扱うように調整する。

さて、芥川龍之介の小説が多いことといわゆる定番教材が多いことに批判もあろうかと思う⁽¹⁶⁾。芥川作品を三年間の前半の軸とするのは、与えられた時間内で小説の読み方——テクストの語りや構造⁽¹⁷⁾に着目した読み方——を学ばせ(経験させ)たいからである。少なくともネット上の読者レビューレベルの読みを超えるための学びをさせることを学習の目標とした。

さらに、与えられた時間の中で、読みの成果を表現活動に結びつけることを重視した。表現活動の例としては、『蜜柑』は五名一組でのリレー小説の作成を、『羅生門』は場面を叙述に基づき絵におこし直す活動⁽¹⁸⁾を、『藪の中』は犯人特定の根拠を示した web page の作成を設定した。芥川の作品はこのような学習活動を行うにあたり、質・量ともに適切だと判断している。

評論や他のジャンルの扱いは、文学教材の単元設定とは別立てにするが、授業で扱う学習内容と関連性がある文章、例えば作品研究の論考など、教科書に載っていないものでも投げ込み教材として授業で読ませた。また長期の休みには、授業で学んだ読み方を意識

させて芥川の作品を二十ほど読ませ⁽¹⁹⁾、芥川作品間で通底していること、気づいたことなどをレポートにまとめさせた。複数の作品に共通して描かれる具体的な(物)が指摘でき、その関連をぎこちなく説明できるだけでもよい。作品の表現や作品間の関連性を意識して読み、気づいたことを作品(間)で意味付ける。クラスの全員が基本的な知識は共有できて、他者にそれを伝える表現活動をさせることを目的とした課題である。

『ころ』は、第二学期の中間考査以降、文庫本一冊を用いて授業をする。長いときは、ほぼ年度末までの四ヶ月間『ころ』の授業が続く。なお、授業で扱うまでに、通読と疑問点を拾いだす作業は行わせる。途中で一つ二つの関連する評論文を読ませることもあ⁽²⁰⁾るが、多くの場合は、『ころ』の読みが中心になる。この授業は作品の力にも助けられ、生徒には毎回かなり好評を博した。不登校傾向の生徒が噂を聞いて、この授業だけ受けに学校へ来るということもあつた。また、私はほとんど話さず、生徒の発言をコーディネートするだけで何時間も授業が成立したことがたびたびあつた。

このような実践は、学力の低い層の生徒に対しても

可能なのかという疑問が起ころのではないだろうか。私はそれに対してこれまでの実践の経験から、「時間をかけ、課題の設定を緩やかに組み直すことで、問題なく対応できる」と自信を持って答える。

誤解を恐れずもう一步踏み込んで述べるなら、「生徒を侮ってはいけない」と思っている。むしろ、学力の低い層の生徒ほど、意図的に経験させることが必要なのではないだろうか。経験することで、一握りかもしれないが、また個人の中で少しかもしれないが、確実に生徒は変わる。たとえ変わったように見えない生徒でも、彼らが日常生活では経験することのない思考を経験することで、これまでに意識的に経験することのなかった思考のあり方を知る。先の不登校生徒のエピソードなどは、その例に当たるかもしれない。人は確実に成長する。成長への支援は、教科指導においても可能である。

さて、本人に余り自覚はないのだが、学力の低い層の生徒が時として目から鱗が落ちるような気づきを現代文でも古典でもする場合がある。考えてみれば当たり前のことで、生徒は目の前の文章だけを見ている。言い方を変えれば、作者に関する知識や歴史的背景などを問題とせず、文章自体を理解することのみに注力

する。道徳的に読もうともしない。生徒の文章の理解は、読み方を教えていく中で徐々に的を射たものになっていく。

教師はそれなりの知識や先行研究・先行実践に縛られている。学力の高い層の生徒もそれなりの常識や世間体に縛られている。それを悪いこととは思わない。一方、学力の低い層の生徒はそこで疑問を呈することが研究の世界では常識外れと判断されるような部分にも素直に違和感を示し、「わからない」と言う。教師が自明だと考えていることでも、もしかするとその常識自体がすでに何らかのフィルターを通った誤ったものかもしれない」と考えれば、古文の場合などは生徒の方が書かれた当時の人々の読みを無意識に行っている可能性もある。

教師がこのような謙虚な姿勢を持つことは大切である。なぜなら、このような謙虚な姿勢は、授業に大きく影響を与える。生徒が「自分の考えたことが受け入れてもらえるかもしれない。気づいたことを発言して（書いて）みよう。」と思えることは、一人の生徒と教師の双方の対話を生み、続いてそれが他の生徒達にも伝播し、教室が教材を介して三者間の双方向的な対話に基づく学習の空間に変わっていくからである。

グループで話し合いをさせ、発表させることだけが「主體的・対話的」で、深い学び」を成立させるのではない。最終的には、学級全体が「主體的・対話的」で、深い学び」の場になること（をを目指すこと）が重要である。先に述べた教師が話さない『こころ』の授業は、それが実現できたものだと考えている。繰り返しになるが、「生徒を侮ってはいけない」、のである。

五 結びにかえて

授業実践は様々であってよい。ただし、教師が目の前の生徒の国語の力を伸ばしたいという確固たる信念を持つていることが、何よりも大切である。その信念は、自然と教材研究・作品研究の深さ、学習方法の創造につながる。そして現状が生徒のために果たしてよいか否かを自覚的に考え続けることになる。現状への懐疑と言えるだろう。「私製 国語科の授業」は、その中から生まれてくる。

現状への懐疑について例をあげてみよう。古文は、残念だが現代語訳を介してしか理解できない。教師は生徒のために古語の知識や学校古典文法等を抛り所として現代語訳をすることに執着し、生徒は

教師の言うことを理解しようとして現代語訳をひたすらノートに書き留め続ける。現代語訳は古文を理解する手段になっている。このような現状を生徒の学力保証や入試対応を言い訳にして、無批判に受け入れていないだろうか。

詳しく述べることはできないが、近年出版された糸井通⁽²¹⁾や藤井貞和⁽²²⁾の「語り」に着目した仕事を踏まえて古典文法の学習を行い、古文の表現に向き合っていけば、時代を超えて生徒が語り手や登場人物との対話が可能になる豊かな現代語訳が完成するであろう。古文との対話が可能になった古文の現代語訳は、表現活動にもなる。すなわち、理解のための手段であった現代語訳を、学習の最終目的として設定することが可能になる。そのような学習が伝統的な言語文化、古文の継承者を誕生させることにつながると考えている。現代語訳をこのように捉え直すことで、古文の授業が変わっていくのではないだろうか。

もう一つ、現代文の例をあげる。

高校三年（間）⁽²³⁾の最後の現代文の教材に『気がかり』（黒井千次）を取り上げて作品分析をし、生徒がその成果のプレゼンテーションをする授業を行うことにしていた。私たちが得体の知れない大きな力によって

一つの方向に巧妙に誘導されている可能性とその危険性を、生徒が『気がかり』の作品分析を通して気づき、自分たちが生きている今を第三者の視点で見つめ直すことの重要性を理解させて、人生の新しいステージへと送り出したいと考えていたからである。

最も恐れているのは小稿で繰り返し述べたように、得体の知れない大きな力によって我々が巧妙に一定の方向へ誘導されている現実には教師が無自覚のままにしていることである。したがって、その巧妙な誘導に気づき、自立した行動を起こす力を持つことが、教師にとって重要であることを理解してほしい。そのためにも「私製 国語科の授業」を創造できる自立した国語科教師が増えることが大切であり、今望まれている。そして、それが「主体的・対話的で、深い学び」の創造と実現⁽²⁴⁾ができる教師の誕生にも深くつながっていることは、あらためて述べる必要もないだろう。

【附記】

小稿は、第27回信州大学教育学部国語教育学会での講演をもとに、適宜加筆し、まとめ直したものである。

学会当日は充実した二本の研究発表後の講演で、出席者にはお疲れもあったかと思うが、雑ばくな話に最後まで熱心に

耳を傾けていただいた。お招きいただいたことともに、感謝の気持ちで一杯になった。また、現在信州大学教育学部の友田義行先生は、私が公立高校の教師をしていたときに教えた生徒である。講演の中で先生が一年生一学期に書いた『蜜柑』のノートを紹介した。与えた課題以外に、自分で調べたことがぎっしり書かれているノートである。先生の文学研究に対する思いの強さと能力の高さが、当時すでに垣間見られたことを出席者に知っていただけたことを嬉しく、誇らしく思う。

私が国語の教師として関わった生徒が、日本語や日本文学に関わる道を志し、研究者として立派に活躍していることは何よりも嬉しい。その一人である友田先生の前で、そして私の大好きな信州の地で、講演をさせていただいたことは、まさに教師冥利に尽きるという他ない。

附記が少々長くなった。最後になったが、小稿の執筆を含め、今回のような機会を与えていただいた信州大学の先生方と国語教育学会に、厚く感謝を申し上げます。

【注】

(1) TALIS 2013 は、第二回の OECD 国際教員指導環境調査である。OECD の学力調査には過敏に反応していると思われる

日本が、なぜ第一回の調査（二〇〇八）に参加しなかったのか、不思議に思うくらいである。当時の OECD 担当者の発言によると、「調査があったことを知らなかった」ということである。

（２）学校で「スクラップ」的なことを行うことができないのは、それが前の世代の仕事を否定することにつながるという受け止め方がされる点に原因の一つがある。詳しく述べられないが、人事への影響も色濃くある。また、教育現場を知らない人間が費用対効果を前面に押し出して、教育行政にも申す風潮にも一因があると考えている。

なお、最近では、口比嘉高が著書『いま、大学で何が起きているのか』（ひつじ書房 二〇一五年）の中で、「企業経営の論理」が大学の研究・教育の中に持ち込まれ、「費用対効果」が重視されている現状とその負の影響を鋭く指摘している。

（３）荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ 学歴主義と平等主義の戦後史』（中公新書 一九九五年）二一五―二一八頁。

（４）例として学力の高い層の生徒がいる高校に、スーパー・サイエンス・ハイスクール（SCH）やスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定が行われる傾向が強いことをあげておく。なお、学校に配分される予算も、この制度が始まった最初の頃に比べると減額されている。

（５）「非日常」という捉え方は、例えば、暴力やハラスメント行為なども容認されるという受け止め方がされるという可能性がある。しかし、小稿で使用する「非日常」は、生徒の成長を支援し促すための日常生活ではできない体験ができる状況・状態という意味で使用している。

（６）このような状況に無批判なまま「キャリア教育」を行う無自覚さは何よりも問題であろう。おそらく生徒は教師の語ることの不合理や矛盾を薄々感じている。なお、「成功≡幸福／不成功≡不幸」という考え方を疑問視することについては、三木清『人生論ノート』（新潮文庫 他）の「成功について」の章を是非参照されたい。

（７）例えば、太宰治『走れメロス』を好む生徒が抱く「人間の信頼・友情を大切にしたい」という思いなどは大切に育てる必要があるだろう。

（８）日本文学協会国語教育部会では、田中実の第三項理論を用いながら、授業における読みを通して、「自己認識→自己破壊→自己の再構築」が生徒の中で起こると説明する。

（９）西林克彦『わかったつもり 読解力がつかない本当の原因』（光文社新書 二〇〇六年）一六七―一七九頁

（１０）郵政グループが郵便局などで販売する切手を貼らずに出せる葉書を指す。郵政事業が国の手を離れたため、正式には現在官製葉書は存在しない。

(11) 小稿の一つでも述べたが、教科教育をこのレベルまでしか考えられないほど教員が忙しい現状がある。現実には他の「〇〇教育」を行うために、教科教育にかける時間を減らして調整をしているのが本当のところかもしれない。

(12) 「日本文学」 Vol. 67 第5号 (日本文学協会 二〇一八年) の特集「教科書と古典」では、国語の学習に対する教師の固定観念が、学習内容や学習方法の自由度を狭めているとの指摘が随所でなされている。参考にされたい。

(13) 進学実績を上げることが「明確な教育目標」としている学校ではない。思考する力を生徒につけることを目標にしている学校である。このような考えで学習を展開する学校は、すでにコンピテンシーを重視した学習を構築していると言える。

(14) 拙稿「古文学習の現状と改善の方向性(一)」『龍谷文学論集』第四八五號(龍谷叢書 二〇一五年三月)二三～四八頁。拙稿「古文学習の現状と改善の方向性(二)」『龍谷文学論集』第四八六號(龍谷叢書 二〇一五年一〇月)九七～一二九頁。拙稿「古典教育における「音読」と「作品完読」、「学校古典文法」、「古典を学ぶ意義」について」『月刊国語教育研究』No.五四九(日本国語教育学会編 二〇一八年一月)四二～四九頁 他

(15) 教員に採用された初年度からこのような見通しのある

組み立てができていたのではない。私の場合は、十年程度の教員経験を経てようやく方向性が見えだした。私の教師としての成長(変化)と、学校への生徒用コンピュータの導入・インターネットの使用環境の整備などソフト面・ハード面の学習環境が整備されていく中でできあがったものである。

(16) 購入させた教科書を一年間全く使わなかったことがあり、保護者からご意見を戴いたことがある。生徒は授業の内容が充実していることを保護者に伝えてくれたのだが、保護者にとっては納得がいかなかったようである。それ以降、年に一度は教科書を使うようにした。

(17) ここでは、簡単に述べると「作品内での表現の関連性」という意味で用いている。教材(テキスト)に「何が書かれているのか」だけでなく、教材(テキスト)が「どう書かれているのか」まで授業で取り上げ、生徒と考えていく。

(18) 生徒が関連性を見つけられるように、数作品は指定する。また国語科の学習において授業外で生徒に一定量の文章を読ませることは、必須の学習だと考えている。

(19) たとえが極端になるが、是非述べておきたい。授業が知的なエンターテインメント、例えばテーマパークのアトラクションのようになれば、生徒は学校へやってくる。好きなアトラクションもあれば、苦手なアトラクションもある。

る。最初は本当にどれが好きでどれが苦手かはわからない。

食わず嫌いの場合もある。しかし、経験を重ねていく中で本当に好きなものと苦手なものが出てくる。そして好きなものには、何度も足を運ぶ。その繰り返しの中で新しい楽しみ方を知り、おそらく他の生徒の言動に影響を受けて、あるいは誘いを受けて、他のアトラクションへの興味関心が芽生える。また、個人の成長にしたがって、好きなもの、苦手なものも変わっていく。すなわち、「自己認識↓自己破壊↓自己の再構築」が繰り返される。その中で、生徒は成長を遂げていくと考えている。テーマパークは非日常の世界である。

(20) 例えば、よく知られている『枕草子』の「春はあけぼの」の段や『徒然草』の序段の解釈には複数の説があり、未だ定まっていないことをあげておく。

(21) 糸井通浩『日本語論の構築』(清文堂 二〇一七年)・『語り』言説の研究』(和泉書院 二〇一七年)。いずれも、過去に発表した研究論文をまとめたものである。

(22) 藤井貞和『日本語と時間 〈時の文法をたどる〉』(二〇一〇年 岩波新書)・同『文法的詩学その動態』(二〇一

五年 笠間書院)

(23) 初出は、「週刊アンボ」第7号(週刊アンボ社(株) 一九七〇年二月九日発行) 五四・五五頁。

昭和六十一年初版(昭和六〇年三月三十一文部省検定済教科書)『新現代文』(三省堂)に採録されていた。ストーリーは単純だが、テクストの理解には叙述に即して語りや構造を分析し、歴史的背景を持ち込まないと読み切れない作品である。インターネットの活用が有効な作品だと理解している。

(24) 平成二九年・三〇年三月に告示された学習指導要領では、「主体的・対話的で、深い学び」の成立が重要視されている。しかし、小稿で述べる「私製」の授業を創造してきた多くの教師の授業では、これまでも既にその学びが成立してきたと捉えている。

(ほった さとし 龍谷大学文学部)